

石原莞爾とその関係者を中心とした 共同体運動の変容

—伊地知則彦が創唱した宗教的信念体系の伝播・浸透・定着を通して—

内村 琢也

A Study of the Community Building Movements Led by
Ishiwara Kanji and His Friends and Its Transformation
Process through Propagation, Penetration and
Stabilization of the Religious Belief of Ijichi Norihiko.

UCHIMURA Takuya

1 はじめに：問題設定と分析枠組み

1936年から1949にかけて、石原莞爾とその関係者を中心とし「村づくり」という一種の共同体運動が旧満洲、中国大陸、山形県庄内地域（戦後・山形県鮎海郡遊佐町・西山村：現在西浜部落と呼ばれる）で展開された。しかしその学術的研究はほとんどされず今日まできている。

本稿では、晩年の石原が特に力を注いだ「西山村づくり」へと最終的に収斂される、西山村以外の特定地域で行われた「村づくり」について以下のようにグルーピングを行い、共同体運動の変容過程を解明する。グルーピングを行った理由は、本稿のタイトルである石原とその関係者に焦点を当てたため、その関係者とはいかなる人物であったのか、またどういった社会的背景をもとに石原と接触し得たのか、石原と接触したことによりいかに共同体運動が展開されたのかを明確にし、最終的に3つの「共同体運動」モデルを提示するためである。以下、特定地域で行われた「村づくり」に関し、グルーピングを行いたいと思う。

先ず、旧満洲を含めた中国大陸における大農園事業に関わった、鐘紡社長・津田信吾、池本喜美夫、武田邦太郎、近藤和子、駒瀬秀子を「Aグループ」と呼ぶ。同グループは池本を首班とする民間企業によるモデル農場・農村の創設・経営を行った。中でも、武田が従事した鐘淵啓明農場は大農場経営の中で唯一、模範農村建設を目指していた。本稿では、「Aグループ」が関与した「村づくり」を脱帝国主義的「ギブアンドギブ志向的共同体運動」モデルと呼び、同農場の経営状況から「村づくり」の内実に肉薄する。

次に、1940年頃、石原莞爾は五族協和の「村づくり」を構想した。当初軍人によるとされた、「村づくり」であったが、東條英機によって頓挫する。石原は軍人として果たせなかった北満移駐による五族協和の「村づくり」を、民間人を伴うことで補おうとし、東亜連盟協会庄内支部の「村づくり」運動に採用した。戦後、かつて庄内支部が目指した世俗的「村づくり」は「西山村づくり」へとシフトする。西山村は行政区分上、山形県飽海郡に入る。1945年2月の段階で同地域の農村改革が東亜連盟運動で企図されていた。発案者は、後述の桐谷誠〔内村2009：129〕であった。庄内支部の「村づくり」と「西山村づくり」に関わった桐谷誠・武、精華会員の修錬道場であった「日輪兵舎」の管理人を務めた歌川平次郎・庸子夫妻及び、小松健作、渋谷孝（全員西山精華会に所属〔『武田邦太郎関係文書』71〕）、仲條立一、同会の指導者的存在であった石原莞爾とその妻（1946年10月12日入植）を「Bグループ」と呼ぶ。「Bグループ」総数（後に入植する武田、近藤を除く）は26名となる。同グループが関与した「村づくり」を世俗的「農工一体志向的共同体運動」モデルと呼ぶ。「Aグループ」に属した武田が西山村に入植する以前に行われた農村工業事業はことごとく失敗する。以後、武田が同地へ入植したことにより「西山村づくり」は宗教的な共同体運動へと変容する。

上述した宗教的な共同体運動は石原を信仰の師と仰ぐ伊地知則彦を中心とした「わとう会」に端を発す。同会は終戦直後、旧満洲・長春にいた伊地知の下に武田、近藤、駒瀬という鐘紡関係者と蒙古で教職に就き伊地知と深い人間関係を築いていた入江辰雄等が組織した非公式な宗教団体である。同会所属メンバーを「Cグループ」と呼ぶ。同グループが関与した「村づくり」は、「大聖霊信仰」による「仏国土建設」（「わとう村」建設）を目指したため、

「仏国土建設志向的共同体運動」モデルと呼ぶ。同グループメンバーは引揚によって、石原を指導者とし「Bグループ」メンバーが展開していた「西山村づくり」に従事することになる。日本への引揚後に「西山村づくり」に関与した鐘紡関係者・武田，近藤，駒瀬を「A・Cグループ」と呼ぶ。

以上，A，B，Cグループが「村づくり」の構想を抱き，それぞれ独自の活動を展開しながらも，最終的に「西山村づくり」へ収斂される。本稿は，社会変動や人的資源の変容を経ることで，A，B，Cグループの共同体運動そのものが変容していった過程を追う。特に「わとう会」の宗教的信念体系が武田によって西山村へ伝播され，もともと同地に存在した宗教的信念体系が如何に変容したのかを，森岡清美・西山茂 [1979] が妙智会研究で採用した分析枠組み，①山形県鶴岡市湯野浜への妙智会信仰の伝播・定着過程の研究と，②妙智会信仰の受容が，伝統的な宗教実践にどのような影響を与えているかを論じた西山の研究 [西山1978] を参考にして解明する。ただ本稿では，森岡・西山の分析枠組みを，(a) 西山村への精華会信仰の伝播・定着過程の研究と (b) 「大聖霊信仰」の受容が，精華会の宗教実践にどのような影響を与えたのかを論じた研究へと変化させた。又，上記の宗教的信念体系を西山村に定着させた「西山村づくり憲法」と，修練道場「日輪兵舎」の機能について宗教社会学的考察を加えたい。

2 鐘淵紡績会社農務課によるモデル農場・農村建設

— 「Aグループ」による共同体運動 —

(1) 「Aグループ」の人員と略歴

「Aグループ」が行った「村づくり」について，津田信吾，池本喜美夫，武田邦太郎，近藤和子，駒瀬秀子の関係から説明したい。

まず，津田信吾の略歴を紹介する。津田は鐘淵紡績株式会社（以下鐘紡）・社長（任期＝1930年6月～1944年1月）である。津田は，1933年，アンゴラ兎の飼育を開始，1935年，別府種牧場開設，1936年，満洲の王府種牧場開設。1937年2月15日，鐘紡農務課（農林部）を設立，以後大陸への仕事を拡大した [鐘紡株式会社1988：312]。

かねてから池本農業政策に関心を持ち共鳴していた石原莞爾（当時，参謀

本部戦争指導課長)が、「池本農業政策¹⁾を中国・満洲で実現すること、満洲国設立後の中国との融和と、現地の五族協和実現の道を果たすことになる」との信念のもとに、1936年9月18日、芦屋の津田邸で中野正剛と共に池本を津田に引き合わせた(池本を石原に引き合わせたのは中野であった)。

池本の語る農業政策に共感した津田は、結局、池本を鐘紡に招聘して農務課長に任命し、農務関係についての予算・人事の権限等を大幅に委ね、大陸での農務関係事業の拡大を意図した」[鐘紡株式会社1988:312-3]。

次に池本喜美夫の略歴を紹介したい。池本は、関東大震災の翌年にあたる1924年に渡仏する。1931年、フランス国立ナンシー農科大学大学院を卒業し理学・農学博士号を取得、翌年東京農業大学教授に就任する。帰国後、陸軍新聞社に招かれ、偕行社で約100名の将官や青年将校を対合衆とし、「世界における日本」という講演を行う。同講演の眼目は「満洲事変は必ず日支戦争に進む可能性がある。どちらが勝っても負けても、互いに百害があつて一利もない不幸を導くだけである。もし日支戦争となれば、当時のわが政府の全予算が8億—この4割は陸海軍の予算—であったが、おそらく数100億と十年戦争を覚悟しなければならぬ。この両国の不幸を未然に防ぐ一案がある。中国の国民の九割五分は農民であつて、その大方は悲惨な生活をしている。日本は千年来中国文化の恩恵をうけている。今こそこの報恩事業として農民の安居楽業のための文化事業を起こすべきである。日支戦争となれば、その緒戦でも十億ぐらいはたちまち失うであろう。その予算で、桃季物言わずとも道おのずから通ずるであろう、モデル農場ないし農村の幾十かを寄贈することであると提案した」[池本1972:6]所にあった。

1936年頃から陸軍・軍務局長磯谷廉介、作戦部長石原莞爾は軍部の予算に依つて、池本の眼目であるモデル農場・農村の寄贈を実行する必要を説き、中野正剛、風見章は民間によるべきだと主張。池本案は、広田弘毅首相、石黒農相、磯谷、石原、鐘紡社長・津田(上述)との協議の結果、軍に代わつて鐘淵紡績により遂行される運びとなった。当時鐘紡は年間1億~1億5千万円の利益を中国で上げており、農林省の年間の全予算の2~3倍ぐらいは問題なしとの見解の下、池本案の実行の任を拝した。ただし、鐘紡が同事業を引き受ける条件があつた。それは、ギブアンドテイク式ではない、ギブア

ンドギブ式の事業目的と明確な目標を設定することで、池本自身が事業の全責任を果たすということであった [池本1972：6-7]。

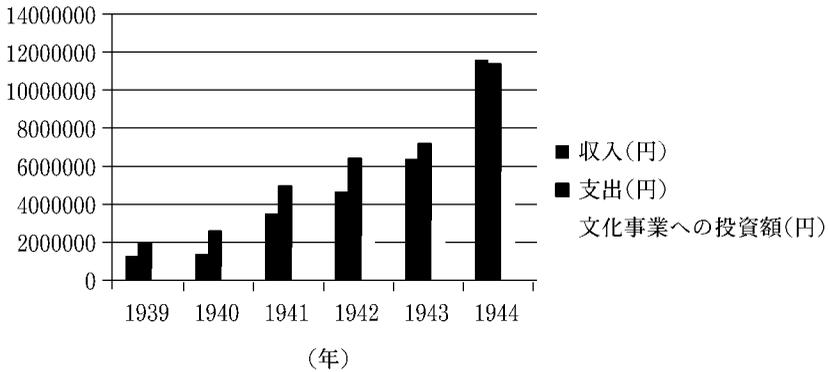
結果、池本は1936年に鐘紡農林部長に就任し、以来終戦までの10年間（農林部・総利益の半分を投資する）、文化事業として、日本及び中国大陸において農場を創設・経営した。

最後に武田邦太郎の略歴を紹介したい。武田は1935年、東京大学文学部西洋史学科を卒業 [武田・菅原1996：巻末]、翌1936年鐘紡農林部入社。武田は池本の部下として [池本1944：9]、中国河北省、吉林省で大農場の建設、経営に参加 [武田1988：巻末]。1939年10月21日、社長（津田）命令の出張の形で、池本と共に第16師団長・石原に会う [「石原日記」1986：195]。武田は当時、鐘淵啓明農場勤務していた。石原の意向により、病身の池本に代わりに、『池本農業政策大観』を書き上げた [武田2005：3]。同書は1942年10月出版された。又武田は、石原に近藤和子、駒瀬秀子の2人を紹介した後、2人を満洲吉林省王府牧場（鐘紡が経営）に連れて行き [野村資料(1)註2007：313]、そのまま同牧場に滞在した [入江1982：278]。「昭和21年10月、伊地知と共に中国の東北、旧満州から帰った武田は、山形県鶴岡市から西山開拓地に移ったばかりの石原を訪ね、石原の勧めで西山に入植し [入江1982：306]、伊地知から託された「わとう村」建設に従事する [野村2007：728]。

（2）「Aグループ」の共同体運動—鐘淵啓明農場を事例として—

鐘紡は戦中、中国大陸に5カ所、満洲国内に5カ所計18カ所の農場、牧場、工場、研究所を所持していた。このうち「村づくり」に関係を有するのは2カ所で中国・啓明農場、満洲・王府種牧場であった。特に前者、戦前（河北省茶淀）・鐘淵啓明農場²⁾において武田邦太郎達が模範農村建設を目指した。用地内には8つの村落があり、約1万人の農・漁民を有した [武田1940：35]。農場事業の眼目は「住民の生活を、政治・経済・社会・教育・宗教等の各生活分野においておよぶ限り向上せしむること、またそれを日本人の科学と技術と資本によって如何にすれば精神的に経済的に十分の合理性をもって実現し得るかをためすこと」 [武田1940：35] であった。1939年3月15日、農場

図1 鐘紡農務課関係収支（昭和20年上期農林部報告による）（単位：千円）



内に希望入学制の小学校を開校した。60坪の公社一棟・教員室1・教室2・教師2名・児童150名（農家の子供。男子110名，女子40名）。3クラス制で1クラスは13歳以上の速成班（1年半で卒業），2クラスは12歳以下の普通班（3年で卒業）であった〔武田1940：39〕。

以上，この「村づくり」に関する記述は余りない。『鐘紡百年史』によると，1944年9月に至るまでは，中国，満洲，内地を含めた18カ所の農場経営は，設備投資等先行投資の為に当初赤字であった。推測であるが，1939年の収入は内地4カ所の収入を凡そ計上したもので，1941年以降に，中国，満洲への投資により収入が大幅に増加したものと考ええる。農務課関係収支は，1944年にはじめて黒字になる（図1・表1）〔鐘紡株式会社1988：316〕。従って，文化事業であった啓明農場の経営は比較的軌道に乗っていたのではないかと推測する。比較的良好であった文化事業も，日本の太平洋戦争敗北により，終焉を迎えることを余儀なくされる。以上，本節では「Aグループ」のモデル農場・農村建設を事例として脱帝国主義的「ギブアンドギブ志向的共同体運動」モデルの特徴を論じた。

表 1 鐘紡農務課関係収支（昭和20年上期農林部報告による）(単位：千円)

年	収入（円）	支出（円）	文化事業への投資額（円）
1939	1321000	2081000	660500
1940	1482000	2698000	741000
1941	3557000	5013000	1778500
1942	4684000	6343000	2342000
1943	6385000	7194000	3192500
1944	11477000	11357000	5738500

[註] 内地（6施設）、朝鮮（2施設）、満洲（5施設（本稿で取り上げた王府種牧場を含む）、中国（5施設（本稿で取り上げた啓明農場を含む））における農務課収支である。終戦により、鐘紡は内地の根室・別府・鹿屋・大隅の4農牧場以外すべての施設を失った〔鐘紡株式会社1988：315-6〕。

3 東亜連盟運動における世俗的「村づくり」

—「Bグループ」による共同体運動—

(1) 北満移駐による「村づくり」構想と挫折—東亜連盟村づくり—

東亜連盟協会代表・木村武雄を中心とした第1段階の東亜連盟運動（1939年9月-1941年6月）と同時期に、第16師団長・石原莞爾が構想した北満における東亜連盟村建設について論じたい。石原は北満開拓とその意義について、「国防のためにも、東亜連盟結成のためにも、北満の開拓はその基礎事業をなすものである」〔石原1977：150〕と論じる。そして、開拓地は先住民族のものを買収する³⁾のではなく、民族協和・王道楽土を建設するために「本当の未墾地を拓いて」行かなければならないと主張する。又、この未墾地に、軍隊が「新しい生活様式を生みながら国防の第一線に立つと、開拓民の生活も、簡易剛健、而も快適な真に日本民族の大陸生活、特に超非常生活に適するものたるべきことは云うまでもない。この北満開拓の遅しい建設事業は同時に日本に於ける簡易剛健生活運動の前衛をなすものである。そうしてかかる気持ちで日本の農民が多数北満に移って行ったならば満洲国建国の精神である民族協和にも極めてよい作用をなすものと信じる」〔石原1977：

150] という。

しかし、石原の東亜連盟村建設構想は東条により頓挫させられる。その一連の同行に関して角田は、「東条は16年1月の閣議声明を以て暗々裡に東亜連盟の解散の意図を表示し……石原の薫陶をうけて東亜連盟思想をも鼓舞された第16師団を石原宿縁の地満洲に移駐させることも之に関連する予防措置として取止めとなり、石原の孜孜として錬成した対ソ浸透の新戦法の北満展開もここに一場の夢と化した」〔角田1967：531〕と説明している。

以上、石原の東亜連盟村建設構想について論じてきた。結論として、北満に師団を送り東亜連盟村を建設することは水泡に帰したが、退役軍人・石原は東亜連盟協会山形支部から庄内支部を独立させ、民間レベルで東亜連盟村建設を目指していく。「村づくり」を行う主体が軍→民間へと変化したのである。次節、民間レベルの「村づくり」についてその特徴を論じたい。

(2) 民間レベルでの「村づくり」

一 東亜連盟協会（同志会）庄内支部を事例に一

退役から5カ月後の1941年8月1日〔平田1942：75〕、石原莞爾は郷里である山形県鶴岡市に帰るとすぐに東亜連盟協会山形支部から庄内支部を独立させる。庄内支部独立は、交通手段を考慮に入れての決定であり、「庄内は山形県という行政枠に縛られる必要はない」という石原の考えからきまったことであった〔野村2007：675〕〔内村2009：73〕。

庄内支部独立と軌を一にして「庄内支部運動要領」が発表される。同運動要領は支部を独立させる上で石原が示したもので、同年9月28日に草稿がまとめられ、『東亜連盟』（1942年1月号）に所収、「庄内支部運動要領」（以下「要領」）という単行本の形で翌年の1943年3月1日、東亜連盟同志会庄内支部から出版された〔『全集7』1977：41〕〔内村2009：73〕。「要領」の内容であるが、同書は3章建てで構成され非常に短く、民間人・石原の構想、池本農業理論を反映している。以下、「要領」の要点である。

2. 実践

イ. 朝鮮人、満洲国留学生の指導

- ロ. 新時代に於ける共同生活創造の急先鋒
 - 1 会員の同行賛美による協力一致, 新しき生活方式の共同体験
 - 2 隣組及至同業組合の最高犠牲者たるべし
- ハ. 庄内が担任すべき経済力の検討, これに基づき
 - 1 池本農業政策の庄内に於ける実践
 - 2 庄内工業建設への協力
 - 3 満洲移民への協力

〔「要領」1986：278〕

「要領」で掲げられた、共同生活創造の急先鋒として行われた「村づくり」の内実に触れたい。庄内支部運動を事例とした松沢哲成は、「村づくり」とは最終戦争必勝のために、「村全体を総合的に「運営」し、そのすべての能力、とくに生産力を増大させることが「村の立直」＝「改革」である。最終的には、東亜連盟村の建設が目指されていた。もう少し具体的にいえば、私的利害を追求する農会・産組・信組・村会などを改革する一方、「適正農家」を基礎にして農村工業を興し北満移民を行うことが目的」〔松沢1982：307〕であったと同支部の「村づくり」とその特徴についてまとめている。

松沢に対する反論であるが、最終戦争との観点で「村づくり」を構想していたというのは石原莞爾個人に限定されるべきである。又、庄内支部運動の「村づくり」及び「西山村づくり」に従事した「Bグループ」メンバーは、あくまで農村での生産力向上を目指し「農工一体志向的」な世俗的「村づくり」を展開するのである。

次に、庄内支部運動の実態に触れたい。同支部員・平田安吾によると、「当支部運動も未だ組織運動以外に歩を進め得ず」〔平田1942：65〕と1942年11月現在の同支部運動の内実を『東亜聯盟』紙上で報告しているように、「村づくり」は現実には遅々として進んでなかった模様である。一方で、「Bグループ」メンバー・桐谷誠が開いた農場が同支部運動の農地改革の一環として実験されていたことは見逃せない〔内村2009：129〕。この桐谷が開いた農場こそ、次節論じる「西山村づくり」が展開される場所であった。庄内支部の「村づくり」は、東亜連盟運動がGHQにより解散を命じられた1946年

1月以降、石原を中心とした「西山村づくり」へと変化していく。

(3) 山形県遊佐町の開拓—「西山村づくり」の歴史

山形県遊佐町の開拓地入植は、戦後1946年に始まった。その1つが西山開拓（高瀬地区）と呼ばれるところで、「西山村づくり」が行われた地域であった〔結城編1974：259-60〕。本稿では先ず、西山開拓の歴史的背景から論じたい。『改定遊佐の歴史』に載った入江の記事を参照したい。

西山開拓は、石原莞爾氏の教えによって発した。もともと西山砂丘地一帯の松林約3百町歩は、石原氏の教えを受けていた桐谷誠氏の所有地であったが、桐谷氏がそこに鋤を入れたのは昭和18年であった。

石原氏は早くから、戦争が全くなくなる永久平和時代の近く始まることを確信し、この新しい時代にそなえて、都市解体、農工一体、国民皆農の革新的社会建設を唱導していた。特に戦後は、日本再建の基礎が国民食料の完全自給にあることを力説していた。

桐谷氏が地味のやせた砂丘地に開拓の鋤を入れたのは、このような石原の理想により、自分の所有地10数町歩を提供して、新社会の基本細胞たる農村部落を先駆的に実現しようとしたのであった〔結城編1974：260-1〕

以上、西山開拓の歴史的背景について簡単に触れたが、「西山村づくり」は、庄内支部運動の桐谷農場に端を発し、石原を指導者としていた事が伺える。石原入植当初は世俗的「村づくり」の様相を呈しており、「Bグループ」が関与した「村づくり」を世俗的「農工一体志向的共同体運動」モデルと呼ぶ。又、石原入植前に、歌川等精華会メンバーが同会信仰を西山村にもたらしたことも無視できない。次節で論じる、石原の西山入植に伴い、精華会信仰は同地に定着する。

(4) 西山開拓と石原入植—村づくりにおける経済的挫折

「西山村づくり」の指導者・石原に於ける、西山入植の①時期と②動機をまとめると以下ようになる。

① 1946（昭和21）年10月12日、石原は鳥海山麓の山形県飽海郡遊佐町（当

時は高瀬村)の日本海に面した砂丘地、西山に入植し⁴⁾、この新天地で新しい「村づくり」を計画した⁵⁾。

- ② 1946年9月26日(木)の「石原日記」に「大井, 加藤 吹浦行引止メノ タメ 安藤 服部卓四郎」[「石原日記」, 野村資料2007:418]という記述に見られるように、石原の入植を大井, 加藤が引きとめた。しかし結果的に彼らの努力は実を結ばず、石原は西山に入植することになった。石原の西山入植の決定的要因について、野村は「桐谷兄弟の覚悟」⁶⁾ [野村2007:724]が大きかったと分析している。

次に、石原の同地入植後、「Bグループ」メンバーが「西山村づくり」の資金源として着手した農村工業事業について述べたい。「Bグループ」の桐谷誠は、農村工業事業として電気製塩事業に参画した。1947年5月10日から突貫作業を開始し、9月19日に塩が出たが、本格的な電気製塩事業は行えなかった [内村2009:136]。結果、「西山村づくり」の資金源と頼んだ農村工業が不発に終わり、西山村内に不協和音を響かせることになる。村内の社会的連帯を図る上で、重要な役割を演じたのが次章で論じる「仏国土建設」という宗教的な「村づくり」を目指した「Cグループ」メンバーであった。

4 伊地知則彦とわとう会—「Cグループ」による共同体運動—

(1) 伊地知則彦と石原莞爾

伊地知則彦は1914年2月25日に鹿児島県で生まれた。実家は日蓮宗の檀家であった。ただ、石原に会う以前、宗教に無関心であった。1937年の渡満後、国民学校の教師となった伊地知は、満洲国建国による理想と現実の差に苛まれ(倫理的剥奪)、1938年3月、新京に向いた。同地で石原に出会い、「日蓮の霊と仏の予言」⁷⁾への信仰に初めて出会ったのである(以後、石原独自の信仰を「日蓮シャーマニズム」と呼ぶ)。当時の事を、伊地知は、「廣いく大海原の中に長い年月の間、濤の間に、浮き沈みしてその表面には青い苔さへまつはりついた一個の浮遊水雷が突如としてある岩礁に触れて(初めて自己内在の靈感にふれて。)轟然爆発したやうなものであつた」[伊地知1942:

182]と回想している。つまり、石原に触発され、伊地知は「日蓮シャーマニズム」に目覚めたのである。以後、伊地知は一週間に一度必ず石原の宿舎を訪問した。そのころ石原が多忙であったため、秘書の杉浦から「日蓮主義信仰の立場から現実の東亜の諸問題を如何に解決すべきであるか」[伊地知1942:182]を学ぶ。杉浦の帰京にともない、伊地知はハルピンへ向かい、独自に日蓮信仰を深めていく[伊地知1942:183]。伊地知は日蓮信仰への造詣を深めていく中で、「真の協和とはお互いが同じ仏の子、神の子としての自覚から出発すべきものです」[伊地知1942:270]、「口の先だけ「世界一家」や「八紘一字」や「四海同胞」では、もうどうにもならないところまで来ているのです。相手の心の裡に仏性を見るが為には、己の心の裡の真性をみがかねば駄目です」[伊地知1942:269]という結論に達し、当初の悩みを解決しうる東亜連盟運動に奔走する。

(2) 伊地知則彦と「わとう会」

終戦直後の混乱の最中、満洲の各地から長春の伊地知の元に男女16名（ほかに子供6名）が集い共同生活を行った。男女16名中には、入江辰雄、近藤和子、駒瀬秀子、武田邦太郎等、「西山村づくり」（後述）の関係者がいた。彼らを中心に「わとう会」が結成された。

同会の指導者・伊地知は「(日蓮の『種々御振舞御書』の一節である：引用者挿入)法華経の肝心諸仏の眼目たる妙法蓮華経の五字、末法の初に一閻浮提に弘ませたもうべき瑞相に、日蓮先がけしたり。わとう共二陣三陣について、迦葉阿南にも勝れ、天台伝教にも超えよかし」[入江1984:220-1]という説の「わとう」という言葉を「法華経の核心であり、多くの仏の教えの中心である妙本蓮華経が第五の五百年に全世界に広まってゆくべききざしとして今、日蓮がさきがけとなった。弟子たちよ(わとう共)二陣三陣と自分について大法を広めよ」[入江1984:220-1]と解し、同会・修錬道場を「わとう道場」と任命した。道場内で指導者の立場にあった伊地知は、涌山先生と呼ばれていた[野村資料, 2007:425]。

道場内の宗教的実践であるが、おまいの時間を毎朝9時と定め、法華題目を唱えていた。唱題中に、「使者・伊地知」[入江1996:215]が大聖靈

(①日蓮の大霊。②仏教的に言うと、久遠実成の本仏。宇宙の中心生命で、根本霊体 [入江1996: 10]。同じ大聖霊でも①・②を二重の意味で使っていた(入江1996: 235))からは御霊教・教えを受けて、実践にうつっていた。入江の言葉を借りると、「大聖霊から伊地知の脳裏に御意志を感得させ、一同の指導に当たらせた」[入江1984: 250]というのである。この大聖霊信仰こそが、伊地知が石原から学び創唱した特殊な宗教的信念体系であった。当初、大聖霊は聖霊(みたま)と呼ばれていたが、大聖霊(1946年6月4日 [入江1996: 234])へ呼称が変更される。その他、同会メンバーは、道場で『法師品』と神通力を中心に学ぶ [入江1984: 227]。以後、道場内の実践は、1946年7月27日まで継続される。

(3) 日本内地への引揚と「大聖霊信仰」の伝播

「Cグループ」メンバーは、1946年7月27日(「わとう道場」を解散)、日本に向け長春を立つ。石原が西山へ入植した10月12日、伊地知は武田と入江に付き添われ福岡県・小倉病院に入院する。2日後の、10月14日に大聖霊から伊地知へ「それから今後は立派な『わとう村』をつくるのだ。これはいまは涌備(武田邦太郎の法名: 引用者挿入)に一切をまかせる。しっかりするのだ」という御霊教があった。

伊地知が「わとう村」建設地について尋ねると「きっと見当たる。涌備にこれを委せるのだ。きまっているのだ。日蓮は申しぬとてよい。使者よ安静にせよ」と大聖霊が答え、村づくりの構想は伊地知から武田に引き継がれ、10月18日午前2時、伊地知は他界する [入江1996: 241-243]。

「わとう会」の指導者・伊地知が掲げた「わとう村」構想は、敗戦を迎えた「社会のアノミー状態」[堀1971: 47]の中で起こった。後に、世俗的「村づくり」を行っていた「西山村づくり」に組み込まれ中心的信念体系となる。以上「Cグループ」が目指した「村づくり」を「仏国土建設志向的共同体運動」モデルと呼ぶ。

本章最後に、伊地知による石原莞爾論を掲載したい。伊地知は「石原莞爾を大聖霊の使者本化上行菩薩賢王が、永久平和実現のために、この地上に出られる準備の役割をもって出る人として」[入江1996: 223]認識していた。

又、1945年3月の石原宛伊地知書簡において、石原の功績を伊地知は以下のようにまとめ讃嘆している。

御老兵様は仏の使者本化上行菩薩賢王の出現を熱烈に待望されました。そしてその準備のために、本門戒壇建立の絶対必須条件と、日蓮聖人が『三大秘法抄』に示しておられた「王法の妙法化」について、具体的に指導し自ら率先身をもって実践されました。それは宗教、政治、経済等のすべてを妙法化し、大聖霊の御心にかなうようにするため、法華経、御遺文をもとにした、民族協和、東亜連盟運動の展開でありました。こうして日蓮聖人の遺言であった永久平和実現に向かって、人類の進むべき道を具体的に明示されました [入江1996：226]

ただし、上述した伊地知の石原論は、後々、偶像崇拜的で、精華会運動にとってマイナスであると同会幹部の小泉菊枝に批判されることとなり [野村資料2007：486]、争いの種となる。

5 武田邦太郎の西山入植と「西山村づくり」ー共同体運動の変容

(1) 武田邦太郎の入植ー大聖霊信仰の伝播と浸透

武田邦太郎は、「西山村づくり」が経済的問題に直面した最中、西山村に入植し、「Bグループ」の現状を打破するため、「西山村づくり憲法」制定に協力した。同憲法は1947年9月に制定された（石原の指導により武田が石原の構想を文章にしたものであった）。以下「西山村づくり憲法」である。

- 一、我等は日蓮大聖人の信仰により、日本および世界復興の先駆となるべき理想農村部落を建設す。部落建設が物心両面に於て略々完成の域に達した時、部落名を改めてわとう村と呼称す。
- 二、我等は等しく日蓮大聖人の御子なり。互の人格を心より合掌し、寸毫も軽侮離反の心なく、必死異体同心の聖訓に副ひ奉る覚悟なり。
- 三、部落の政治は徹底して民主的ならざるべからず。その重要事項は、

- 悉く部落会の決議によって行う。道にかないたる言論には、よし小児の意見なりといえども全部一人残らずこれに服す。
- 四. 部落の政治運営に意見ある場合は、部落会において公明正大にこれを発表し、全部落民の検討を求む。苟も腹藏し、若は陰口を利き、或は私見を他者に強制せず。
- 五. 部落の行政事務は部落長これを担当す。対外折衝並に財務に関し、各一名の補佐を置く。部落長会長は毎月最終会の部落会において当年度の行政事務報告を行う。部落会長および補佐の職務は無給の奉仕なり。
- 六. 部落は5つ又は6つの隣組をもって構成し、各隣組は概ね5戸をもって構成する。明日の隣組を今日の華族のごとくならしむるが我等の理想なり。
- 七. 農業は金銭収入の手段にあらず、耕地はすべて村有とす。戸当り3反歩乃至5反歩の耕地を隣組単位に共同経営し、食糧の自給を図る。但し特殊の研究や嗜好に應ずるため各個適当に若干の自家圃場をもつことを妨げず。炊事または隣組単位に共同す。共同耕地の経営並に炊事の経費は隣組の共同負担なり。
- 八. 現金収入は工業による、工業は村営とし、農工一体の原則に従って常に農業経営と調和して行う。我等は速かに資本即経営者即労働者の理想を実現す。
- 九. 自然に即したる簡素高雅の農村生活を創造す。
- 十. 教育、衛生、娯楽等に関する公的支出は、各個の負担能力に応じ部落会において決定せらるべき部落会費をもって支出す。
- 十一. 聖訓に反したる言動ありたるものは、毎週の法華例会に於て御宝前に懺悔す。如何に忠告するも心より懺悔し得ざるものは部落会の決議によって、わとう村建設より離脱せしむ。[入江1985:288-9]

同憲法は、日蓮信仰を前面に押し出した憲法である。第一条中の「わとう村」が「西山村づくり」における同志的団結の理想として文字化された。この「わとう村」を実現することが同志間で確認されたのである。要するに、「西

山村づくり憲法」が制定されると「西山村づくり」の方向性が変わり、石原を指導者とする精華会のメンバーに活躍の場が与えられたのである。ただ一つだけ注意しなければいけないのは、精華会幹部・小泉菊枝は当初、「わとう会」の指導者・伊地知に対して、一抹の不安を抱いていたということである。小泉は、彼の信仰が偶像崇拜的で、精華会運動にとってマイナスだと思っていた [野村資料2007:486]。小泉は精華会信仰にはない「大聖霊信仰」に根ざした「わとう村」構想を支持していなかったのであろう。ただ、伊地知に「日蓮シャーマニズム」を教授した石原が、伊地知を高く評価していたこと、「Cグループ」出身の武田が小泉の疑問を払拭させたことを切っ掛けとして⁸⁾、西山村在住の精華会員に「わとう村」構想の意義を浸透させたとされる（上述の憲法で可視化）。以後これまでの精華会信仰⁹⁾の柱「五百歳二重の信仰」と「本門戒壇の確立」に「霊なる父日蓮の預言を信じる」「大聖霊信仰」が加わり、新たな「西山村づくり」が展開される。

「西山農場」で上記の憲法で掲げられた部落会会長というポストに就いたのは、「A・Cグループ」の武田であった [入江1985:291]。武田の西山入植について「Cグループ」メンバーの入江辰雄は、「(伊地知から：引用者挿入)「村づくり」の教えを受けた武田は、西山こそ「わとう村」建設の地と信じ、翌年(1947年：引用者挿入)5月に武田らが入植」 [入江1982:272] したと論じている。しかし、入江の記述では武田の入植日を特定できない。そこで、野村資料を便りに武田の入植日を特定したい。武田の西山入植に関し、野村資料には具体的日時の記載はないが、1947年5月6日付石原宛小泉菊枝書簡を見る限り、小泉が「定めし武田先生ももう西山農場にお帰りの御事と存じます」 [野村資料2007:498] と西山の石原に宛てていることから5月6日以前のことでありと推測できる。

以上、本節で詳細を検討した武田の西山入植と部落会会長就任が「西山農場」運営の出発点であった。又、別の観点からいうと、「仏国土」を意味する「わとう村」づくりへの出発点でもあった。次節、西山村における修錬道場「日輪兵舎」の機能とその用途について論じたい。

(2) 西山村における修錬道場の機能—精華会信仰と「大聖霊信仰」の定着—

本節では西山村における宗教的信念体系の定着を意味し、「教団の地方拠点の充実であるとともに、宗教的信体系の地域社会での制度化・恒久化への足がかり」[磯岡1999:41]という役割を果たすであろう修錬道場「日輪兵舎」の用途とその機能について論じる。

まず、「日輪兵舎」（別名：西山道場、日輪講堂）の用途として、当時「Bグループ」に属していた仲條立一は、「私どもが西山農場で汗を流していた頃は、東亜連盟の同志をはじめとして全国有志の修錬道場でもあり、また戦後の混乱の最中であって、娯楽やコミュニケーションに飢えていた近郷の青年男女が、昼の農作業を終えてから5キロもある道のりを通い、歌や踊りの練習をして部落毎のお祭りの演出を熱心に工夫した場所でもあった。また石原莞爾先生を尋ねてこられた方々が宿泊されたり、酵素肥料の実習もここで行われた」[仲條1996:231]と「日輪兵舎」が多目的に使用されていたと回想している。特に全国有志の修錬道場としての機能が重要で、新しい精華会信仰（旧精華会信仰+「大聖霊信仰」）の西山村定着に貢献したと考えられる。

次に「日輪兵舎」の使用頻度を計上したい。「A・Cグループ」に属した駒瀬秀子の「西山の聖日」という記事を見てみたい。その中で、駒瀬は、

東北は3月と言いましても、風雪あらく寒さ厳しうございます。日蓮大聖人をお父様と仰ぎ、新らしき村づくり建設に全力を注いでおります同志にとりまして、最も嬉しく最も楽しい事は、日蓮大聖人の御聖日をお迎えし、心よりお祝いする事でございます。月に一度の月例会は、なるべくこの御聖日をお選びしていたします……1年を通じまして御聖日のきまっている月例会は左記の如くです。

2月16日 宗祖降誕會

4月28日 立正會

5月12日 伊豆法難會

7月8日 顕正會

7月16日 宣正會

9月12日 龍口法難會

10月13日 鶴林會

11月11日 小松原法難會

○

この外週に1度の例會をもち、月例會と同じような順序で、午後7時半から始められ、8時5分前、宗歌お供え、正8時勤行の後、如説修行讚歌の順序で終り、1週間の勉強、西山精華會の協議等それぞれ話し合います〔駒瀨1949：34，37〕

と1949年3月当時「日輪兵舎」で行われた会合の詳細について記している。聖日と週1度の会合となると年に最低56回の会合が「日輪兵舎」で行われていたことになる。以上、「日輪兵舎」は西山村に於ける聖を司る空間として機能していたと推測する。経済的には不発であった西山村であったが、精華會のメンバーを中心とした宗教活動が定期的に行われており、同会の信念体系に依る宗教的統合が行われていた。つまり、「日輪兵舎」は新しい精華會信仰（旧精華會信仰+「大聖靈信仰」）に根ざした宗教的な「村づくり」における同志的団結を生むという機能を果たしていたのである。

ただし、指導者・石原の死（1949年8月15日）を境とし状況は一変する。「西山村づくり」関係者が徐々に西山を後にし、最終的には「西山村づくり」は水泡に帰す。又、村づくりの推進団体であった精華會も解散するのである。従って、本節で論じた「日輪兵舎」は西山村における新しい精華會信仰の恒久化・制度化に失敗したと言わざるをえない。しかしながら、入江が「西山村づくり憲法の精神は堅持され」〔入江1985：306〕たとしているように、武田の努力により共同体運動は形を変えて残っていったと考えられる。

6 むすびにかえて

本稿において、1939年から1949年にかけて石原莞爾とその関係者が中心となって展開した「村づくり」という共同体運動の実態とその変容過程を追った。特に晩年、石原が力を注いだ「西山村づくり」へと最終的に収斂された、「村づくり」について以下のようにグルーピングを行った。又、グルーピン

グと並行して、各グループの特徴を反映させた「共同体運動」モデルを提示した。

- ① 「Aグループ」＝脱帝国主義的「ギブアンドギブ志向的共同体運動」モデルで、鐘紡・津田信吾、池本喜美夫、武田邦太郎、近藤和子、駒瀬秀子が関与し、1944年に農務課収支が黒字に転じ、比較的良好な「村づくり」が行われていたと推測する。
- ② 「Bグループ」＝世俗的「農工一体志向的共同体運動」モデルで、石原の北滿移駐計画に端を発し、東亜連盟協会の庄内支部を中心に展開された。同支部の「村づくり」は、戦後、「西山村づくり」へと変容した。
- ③ 「Cグループ」, 「A・Cグループ」＝「仏国土建設志向的共同体運動」モデル。

最後に、西山村で行われた共同体運動の変容を、

- (a) 西山村への精華会信仰の伝播・定着過程の研究
- (b) 「大聖霊信仰」の受容が、精華会の宗教実践にどのような影響を与えたのかを論じた研究

という、序論で提示した2つの分析枠組みを通して整理したい。

1946年当時、西山開拓がはじまった段階で、歌川等、精華会員が「西山村づくり」に従事し、西山村に精華会信仰が持ち込まれた。その後、精華会の指導的立場にあった石原が同地に入植したことにより、同地に精華会信仰が定着した。石原入植後に行われた農村工業事業が失敗した後、「Cグループ」の武田が同地へ入植し、「大聖霊信仰」が伝播された結果、宗教的混乱を招くことになった。しかしながら、石原と伊地知の信頼関係、及び、武田が小泉の疑問を説いたことで宗教的混乱を回避することができ、新しい精華会信仰（旧精華会信仰＋「大聖霊信仰」）が構築された。同信仰は、「西山村づくり憲法」と修錬道場「日輪兵舎」の機能を通して同地に一時的に定着した。最終的に、「西山村づくり」は、②「Bグループ」の世俗的「農工一体志向的共同体運動」モデルから③「Cグループ」の「仏国土建設志向的共同体運動」モデルへと変容したといえよう。

歴史学的考察を中心に論じられてきた従来の石原莞爾研究に、宗教社会学的考察を加えた本稿が、新しい研究視座を提供できたとすれば幸いである。

〈注〉

- 1) 池本農政とは、「適正規模専業農家（1戸当たり約3ヘクタール。ただし東北地方は4ヘクタール、北海道は10ヘクタール前後を標準的な規模として）」と、農村工家（30アール程度の耕地で主要食糧を自給しつつ、農村に分散される精密機械工業、とくに部品加工等に従事する）、さらに満洲に分村、移民する開拓農家等によって、日本農業を再編成することを提言するもので「[武田2005：6]」であった。
- 2) 鐘淵啓明農場は1938年1月、模範農村の建設を目指し建設された。水田を有す。7183町歩、2155万坪〔鐘紡株式会社1988：316〕。『東亜聯盟』（第3巻8号）紙上に於いて、武田著「啓明農場物語」は「同志の「現地の記録」」〔東亜連盟編集部1941：106〕として紹介された。
- 3) 「満洲国青年の見た日本移民」（『東亜聯盟』（第4巻2号））の著者・韓明堂は「荒地は当然の事であるが開墾地迄も買上げてをるのじゃありませんか……ただこういうやり方で行きますと今迄血と汗を流して代々苦心して開墾して来た満洲農民が心の底に「日本のやり方はひどい」という考えを持つ様になるのも自然の成り行きだと」〔韓1942：58〕論じる。また土地買い上げ問題にかんして、「移民する以上土地がなければならぬ……然し之には今迄の所の様な買上方では相互間の感情を破壊する一方であります何しろ満洲農民は日本人の前のみならず吾々の前でさえも余程親しくなければ決して不平をこぼさないで黙ってるので之で即座に今迄のやり方でも満洲農民は喜んで売ってをるのじゃないかと判断するのはとんでもない錯誤であります。大いに事情重を要します。之で行けば永遠に協和が成り立ち得ない」〔韓1942：59〕と警鐘を鳴らしている。留日満洲国学生・韓は解決策として、「会社経営の廃止」〔韓1942：59〕を挙げている。
- 4) 1946年の石原日記を参照する。10月「12日（土）西山へ引越 幸一、大井（小次朗：引用者挿入）、加藤（精三：引用者挿入）見送、多数出迎ヲ受ク」〔野村資料2007：420〕。
- 5) 「西山に新時代の農工一体的「村づくり」を計画して、（石原は：引用者挿入）ここに入った。住居は、この辺り一帯の土地の所有者で石原門下の1人、桐谷誠の提供した8畳の畳の部屋と6畳の板の間、各一つという簡素な家であり、土地も当初は草も生えない痩せた土地であった。面積13・5ヘクタール。昭和21年末、石原夫妻に青年男女、成人、子供を合わせ総計28名による村づくりで、出身は庄内地元の人と他地方から来た人が相半ばしていた。地方では鹿児島から北海道にまで及ぶ人々がいた」〔武田・菅原編1995：229〕。
- 6) 「桐谷兄弟の覚悟」とは、1942（昭和17）年7月4日の石原宛田中久封書〔憲政・増川喜久男関係文書・36-15〕中、田中久によると、「桐谷兄弟の物欲を捨て、山に入らんとする覚悟」〔野村資料2007：136〕であり、その「覚悟は現代青年に又見ることを得ざる」〔野村資料2007：136〕ものであった。
- 7) 石原は後に「予言は神がかりという見方によっては神がかりである。具体的にいえば、例えば、友人同志間で何十里も離れていながら、どうも東京にいる友達がこの頃何か具合が悪いのではないか、と感じて行ってみると本当にからだを悪くしている。東亜聯盟で靈気術と言っているのがそれだ」〔『全集7』1977：320〕と述べ、

予言を神がかりであると説明している。

- 8) 小泉が行った伊地知批判の結果、当初、武田と入江は精華会運動に合流しない旨を小泉に知らせたようである [野村資料2007: 486]。しかし、小泉は武田と入江が何故精華会運動と一緒にこなえないのか疑問が晴れないと反論、3者の問答の末、1947年4月3日の段階で「いつしとなしにわとう会(武田等「Cグループ」メンバー：引用者挿入)の方々も精華会の中で御活躍になることになっ」 [野村資料2007: 486-487] た。ただし、1947年4月17日付、石原莞爾宛小泉書簡によると、「わとう会の方に対し、一抹の不安を持っていましたことは、すべて私の薄信の為でございました……武田先生が御案じになって、私の帰宅後一生懸命な御手紙を下さいました。それに対しまして私も率直に私の不安を申し上げ疑問を全部御尋ね申し上げます。武田先生は今日その御返事を下さいまして詳しく御教へ下さいました。私の疑惑はすべてなくなりました」 [野村資料2007: 489] と小泉が武田とのやりとりを通して、「Cグループ」への疑問を解消したようである。
- 9) 「五五百歳二重説」(別名、「五五百歳二重の信仰」、「末法二重」の信仰)とは、「上行などの四菩薩は、一度は、北伝仏教の計算による末法の初め(南伝仏教の計算では未だ像法時代に「僧」(日蓮)となって現われ、二度目には、南伝仏教の計算による末法の初め(彼の計算では遅くとも西暦2013年まで)に「賢王」(金輪王としての天皇)となって出現し、「世界最終戦争」によって「愚王」を打倒して世界を統一するという説(五五百歳二重説)」 [西山1988: 148-9] である。石原独自の説で、国柱会主流派から逸脱している [内村2009: 2]。国柱会の青年部・精華会は「五五百歳二重の信仰」(石原が創唱)、「靈なる父日蓮の預言を信じる」(伊地知創唱の大聖霊信仰)、「本門戒壇の確立」、「世界絶対平和の確立」(立正安国→仏国土建設)を「教団によって担われている「見える」信念体系」 [西山1976: 1] としている。

【参考文献】

- 池本喜美夫『フランス農村物語』新正堂、1944年(第2版)。東明社、1972年(第3版)。
石原莞爾「石原顧問語録」,「昭和20年12月「昭和維新論講義」(第5手帳版)松沢正美筆記」,「単行本一覧表」『石原莞爾全集7』石原莞爾全集刊行会、1977年。「庄内支部運動要領」たまいらば編『石原莞爾選集6』たまいらば、1986年。
磯岡哲也『宗教的信念体系の伝播と変容』学文社、1999年
伊地知則彦『東亜の日本人』建国学会、1942年。
入江辰雄『石原莞爾と伊地知則彦』暁書房、1982年。『石原莞爾 永久平和の先駆者』たまいらば、1985年。『日蓮聖人の大霊と石原莞爾の生涯』近代文芸社、1996年。
内村琢也「近代日本の東亜連盟運動」創価大学大学院提出修士論文、2009年。
鐘紡株式会社『鐘紡百年史』鐘紡株式会社社史編纂室、1988年。
韓明堂「満洲国青年の見た日本移民」『東亜聯盟』(第4巻2号)東亜連盟協会、1942年2月。
駒瀬秀子「西山の聖日」『王道文化』(通巻275号)精華会、1949年6月。
『武田邦太郎関係文書』71, 国立国会図書館憲政資料室所蔵。

武田邦太郎「啓明便り—河北茶淀にて學友室木あて」『東亞連盟』（第2巻11号）東亞連盟協会，1940年11月。『永久平和の先駆 石原莞爾—その生涯と思想・信仰—』庄内日報社，1988年。『永久平和の基地建設のために』（『宏池』17より抜刷）株式会社文昇堂印刷，2005年。

武田邦太郎・菅原一彪『永久平和の使徒 石原莞爾』冬青社，1995年。

角田順編『石原莞爾資料国防論策』原書房，1977年。

東亞連盟編集部『『現地の記録』を募る』『東亞聯盟』（第3巻8号）東亞連盟協会，1941年7月。

仲條立一「物言わぬ証人—日輪講堂」『永久平和の使途 石原莞爾』武田邦太郎編著 冬青社，1996年。

西山茂「宗教的信念体系の受容とその影響」『社会科学論集23』東京教育大学大学院紀要，1976年。「新宗教の受容による伝統的宗教実践の変化—山形県湯野浜地区妙智会員の事例—」森岡清美編『変動期の人間と宗教』未来社，1978年。「日蓮主義の展開と日本国体論—日本の近・現代における法華的国体信仰の軌跡—」孝本貢編『論集日本仏教史9大正・昭和時代』雄山閣出版，1988年。

野村乙二朗編『東亞聯盟期の石原莞爾資料』（本文中，野村資料）同成社，2007年。

平田安吾「庄内支部運動の其後」『東亞聯盟』（第4巻11号）東亞連盟協会，1942年11月。

堀一郎『日本のシャーマニズム』講談社，1971年。

森岡清美・西山茂「新宗教の地方伝播と定着の過程—山形県湯野浜の妙智會會員調査から—」柳川啓一・安斎伸編『宗教と社会変動』東京大学出版社，1979年。

結城豊太郎編集『改定遊佐の歴史（非売品）』小松写真印刷有限公司，1974年。